

あわら温泉の活性化を考える

～市民に開かれた温泉街としての全国発信～

福井県あわら市 赤神 貴幸



1 はじめに

福井県随一の温泉地「あわら温泉」を有するあわら市では、明治16年の開湯以来、観光誘客を軸にまちづくりを進めてきた。かつての温泉街は観光客が街中に溢れるほどの賑わいがあり、多くの地元住民が足を運ぶなど温泉が身近な存在にあったが、バブル崩壊後、観光入込客数が落ち込み、それに伴い多くの旅館等の宿泊施設や商店も廃業に追いやられ、市民の温泉街への愛着も希薄化してしまった。

このレポートでは、あわら温泉の歴史や現状、市民と温泉の関わり合いについて分析し、かつて地元住民にとって身近だった温泉街がなぜ地元住民に愛着を持たれなくなってしまったのかを考察することで、市民に開かれた温泉街の必要性和市民がもたらす温泉街活性化の有効策を提言していきたい。

2 芦原（あわら）温泉の歴史について

(1) 温泉の発見

芦原温泉は、明治16年9月、地元の農夫が灌漑用の井戸を掘ったところ、薄い塩分を含んだ湯が沸出したのが温泉発祥の起源と言われている。翌17年2月に住民が温泉試掘を行って華氏140°（60℃）の温泉が湧出したことを機に、その附近で続々と井戸が掘られ、葭簀（よしず）張りの簡単な浴場が林立した。この2年間で70数本の温泉が発見されたが、現在登録されている泉源数が74であり当時とほぼ同じであることから、当時の温泉開発があまりに急だったことを物語っている。

(2) 温泉街の発展

温泉発見当時、温泉は近隣住民にとって珍しいものであり、はるばる福井市からも浴客が訪れたり、その湯を川舟で隣町の三国まで運ぶ者も現れたという。また、温泉湧出によって、各地から土地を購入する人が現れ、土砂を盛って湯屋をつくって商売を始めるようになり、瞬く間に湯宿を含む戸数が増え市街化が進んでいった。そのため、温泉街の住民の大部分は村外からの移住者であった。当時はその附近に道路らしい道路があったわけではなく、田の畦道を往来したので、温泉街を建設することとなった。これが、今の温泉街の基盤である。

温泉街建設当時は、温泉のあるそれぞれの地区で中心地に広場を作り、そこに総湯（共同浴場）を設け、周囲に旅館と商店が建ち並んでいた。この総湯中心の営業方針も、内湯の営業が便利であるとの理由からすぐにすべての旅館を内湯旅館方式に切り替えられたが、各地区の総湯はその後も宿泊客のための総湯から地元住民のための総湯へと役割を変えて存続した。総湯の管理運営は各地区がそれぞれ担い、住民にとっては自宅のお風呂のよう

に自由に（一部の総湯は有料）利用することができた。自宅にお風呂が普及し始める昭和後期から総湯を利用しない住民が増え徐々に総湯は廃業を余儀なくされたが、開湯からの長きに渡り、総湯は地元住民にとってかけがえのないものであった。

明治 44 年になると国鉄三国芦原線（昭和 47 年に廃線）が開通し、さらに昭和 3 年には京福電鉄三国芦原線（現在のえちぜん鉄道三国芦原線）が開通したことにより、県内外からの観光客が激増し、温泉街は急速に発展していった。当時の温泉街には、映画館や劇場、遊戯場、物産館など時代の先端をいく娯楽施設や芸妓の手踊りなど、芦原温泉でしか味わえない楽しみを求めて多くの人が集った。特に、一部の旅館の中には船室のサロンのようなダンスホールがあり、観光客のみならず多くの近隣住民が足を運ぶほど地元からも愛される温泉街であった。

（3）災害からの復興

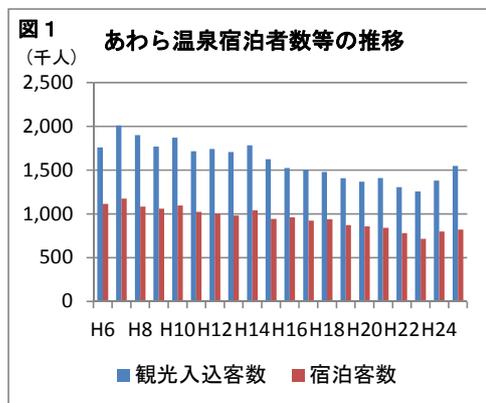
昭和 23 年に起こった福井大震災では、家屋の被害とともにわずか数本の泉源を除き、大部分の泉源が湧出を停止した。こうした泉源はその後交換掘りなどにより復旧した。さらに、昭和 31 年、芦原駅（現在のえちぜん鉄道あわら湯のまち駅）前の一民家から出火した火事は、フェーン現象による強風にあおられて、旅館街の大半を焼失する大災害となった。この災害の復興には、約 1 年半を要した。

これらの大災害は街中に壊滅的損害を与えたが、温泉をなくしてはいけないという思いから住民挙げての復興への努力が実り、一層スケールを拡大させ現在の近代的な旅館が建ち並ぶ温泉地へと変貌を遂げた。この頃の旅館数は 70 軒を超え、芸妓も常時 180 人前後いたと言われていた。

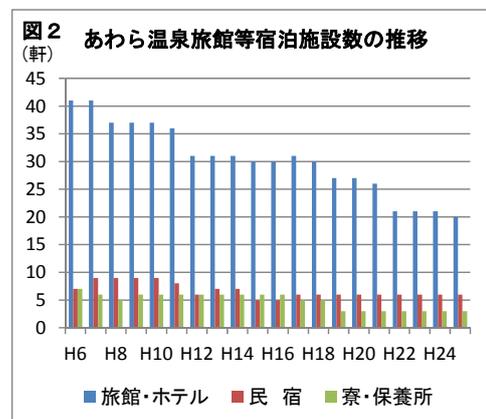
3 あわら温泉の現状と課題

前段で記述したように、これまで地元住民の手によって作り上げられ住民と密接に関わり繁栄してきたあわら温泉であるが、平成 3 年のバブル崩壊によりそれまでのレジャーブームが終わり、また観光ニーズの多様化による旅行形態の変化や海外旅行への流出等の影響を受け、平成 6 年に 55 あった旅館や民宿等の宿泊施設数も平成 25 年には 29 とおおよそ半減している。また、これに伴い、平成 6 年に 113 万 9 千人いた宿泊客も平成 25 年には 86 万 6 千人とこの 20 年で約 3 割減少と衰退している。このことは、福井県が観光客動向調査により算出した観光消費額を基に換算すると、平成 6 年と平成 25 年の比較で約 47 億円減少していることとなる。

最近では、平成 24 年の全国で温泉施設を展開する大手チェーン旅館の開業の影響もあり、観光客、



あわら市観光白書（各年版）より筆者作成



あわら市観光白書（各年版）より筆者作成

宿泊客ともに増加傾向に転じている。しかしながら、老舗旅館の宿泊者数は依然として伸び悩んでおり、危機的な状況が続いている。

このような中、平成 26 年 7 月の舞鶴若狭自動車道全線開通により中国自動車道と北陸自動車道が直結したこと、また平成 27 年 3 月には北陸新幹線金沢開業を控えるなど高速交通体系が整備されることで、これまで馴染みの薄かった中国、首都圏、北関東や上信越等の沿線各地から多くの観光客に来ていただこうと、行政や観光事業者が中心となり観光客が街中を周遊する仕組みづくりを行っているところである。

中でも、平成 26 年 4 月に温泉街の中心地にオープンした北陸一上質な足湯施設と称する「芦湯（あしゆ）」は、総ひのき造りの収容人数 34 人の大型施設で、市の貴重な観光資源である天然温泉や現在では採掘されていない福井県産の笏谷石を使用しており、市民の憩いの場、また市民と観光客が交流する場とし、新たな賑わいづくりの中核施設として市が建設した。オープンからこれまでの 9 ヶ月間で約 11 万人を超える方に利用され、当初の予想を上回る盛況ぶりである。また、現在は、旅館や商店が隣接する温泉街のメインストリート「湯〜わく Dori」を一車線化し歩道を広く改良することで、まち歩きを促すためのハード整備も行っている。



図 3 「芦湯」



図 4 「メインストリート（整備前）」



図 5 「メインストリート（完成イメージ）」

しかしながら、上記のように温泉街の魅力アップのための整備が進められている状況下にあるものの、かつて地元住民が足を運び住民から愛されていたあわら温泉に対する市民の愛着が希薄化している現状について、市民アンケートの結果を踏まえて記述する。市民アンケートは平成 23 年度から市民 1 千人を対象に毎年実施しており、その中で観光に関する市民の意識調査を行っている。結果は、図 6 のとおりである。

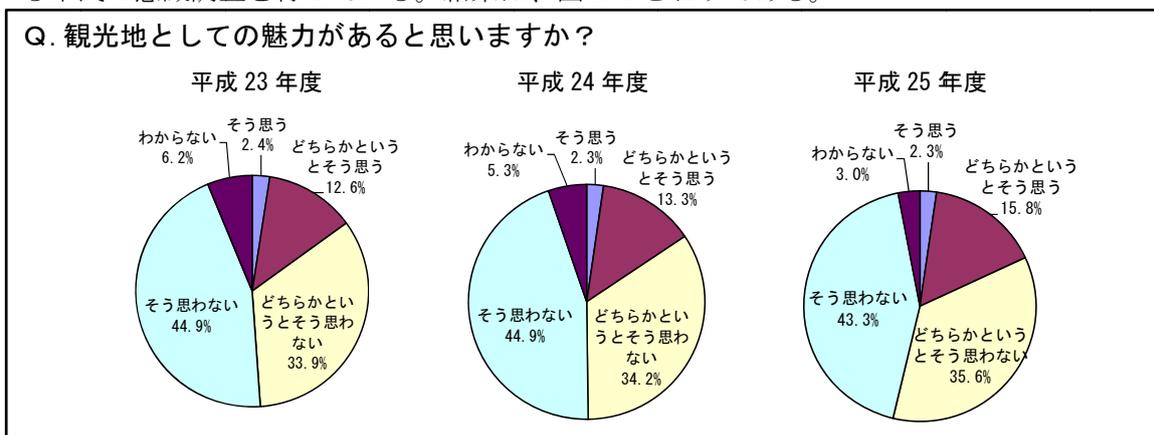


図 6 「市民アンケート結果」（あわら市民アンケート報告書（各年版）より筆者作成）

「観光地としての魅力があると思いますか」の問いに対し、過去3年間に共通して、肯定指向が20%以下、否定指向が75%以上の結果となっている。実に8割近くの市民があわら市は観光地としての魅力に欠けると考えているということである。また、平成27年3月の北陸新幹線金沢開業を控え、あわら温泉街やJR芦原温泉駅周辺における賑わいづくり事業等、観光面での市予算を年々手厚くし観光地の魅力向上に努めているにも関わらず、市民にその思いが届いていないと言える。

4 市民と温泉の関わり合いについて

では、このような歴史を背景に発展してきたあわら温泉がなぜ市民から愛着を持たれなくなってしまったのだろうか。温泉街が人で溢れ市民が足を運んでいた頃と現在を知る市民約20人に聞き取りした内容及び芦原温泉に関する文献を踏まえて考察する。なお、あわら市は、平成16年に芦原温泉を有する芦原町と隣接する金津町の合併により誕生した市であり、聞き取りは旧金津町民を含めて、平成26年11月下旬から12月上旬にかけて個別訪問により行った。

(1) 過去（開湯～昭和50年代）

温泉街建設当時から自宅にお風呂が普及するまでの間は、各地区に総湯があり、またその当時温泉街にしかなかった娯楽施設等の魅力があったため、自ずと地元住民が足を運ぶ温泉街であったことはこれまで記述してきたとおりである。その当時の様子を温泉街の住民（50歳代～80歳代）に聞き取りしたところ、「家族や地域のいろいろな情報を交換できる場でもあったので、近隣住民と顔の見える生活をしていた」や「総湯で毎日近隣住民と顔を合わせていたので会話ができて楽しかった」、「総湯の帰りに家族や仲間と飲食するのが楽しみだった」など、温泉を通して自然と地域コミュニティが図られていたことがわかった。また、総湯に行くことが生活する上で必須のことであったため、温泉が身近というよりは生活の一部といった感覚で認識されており、必然的に住民にとって温泉が愛着のある存在であったのだろう。また、街中の様子を伺うと、「街中に人が溢れ、外に出ると下駄で歩く音や旅館からの三味線の音色が聞こえ、また温泉の硫黄の匂いが漂い温泉情緒が感じられた」との話を聞くことができた。

一方で、温泉街以外の住民にとってかつての芦原温泉がどのような存在であったかについて、市内の温泉街以外の市民（60歳代～70歳代）に聞き取りした。その結果、「温泉に入りに行くことはあまりなかったが、旅館のダンスホールを楽しみに温泉街に仲間とよく出かけた」や「地区の集まりで芦原温泉の旅館に年何回か行っていた」、「子供の頃、親に夏祭りによく連れて行ってもらった」などの話を聞くことができた。この他、「温泉にはほとんど行かなかった」という人も数人おり、同じ市内とはいえ、温泉街を身近に感じて生活していたという印象は受けなかった。

(2) 現在（昭和60年代以降）

高度経済成長期やバブル期には、昔ながらの木造の旅館の多くが団体客向けのビル型の大きな旅館へと変貌した。各旅館は個々に立派な日本庭園を有し、館内にホールや土産屋などを備え、完結型のスタイルを確立したのである。芦原温泉は田んぼの真ん中にある温

泉街で、近隣の自然景観豊かな山中温泉や片山津温泉に比べ、情緒がないとも言われている。まちを歩く人が少なくなり、街中の賑わいが喪失されてしまったのは、囲い込みをする旅館の営業スタイルがもたらした結果とも言えよう。

現在のあわら温泉の様子について、温泉街の住民（50歳代～80歳代）に聞き取りしたところ、「かつて総湯があった頃は温泉が身近に感じられたが、今は自宅にお風呂があるため出歩く理由が見当たらない」や「夜遅くまで旅館から三味線の音が聞こえてくる温泉街の賑わいがなくなって悲しい」など、批判的な感想が多数であった。実際に、地元温泉街の住民にとっては、自宅にお風呂が普及し、それに伴い総湯がなくなったことで温泉街に出歩く機会が少なくなり、また観光客も完結型の旅館が増えたことで温泉街を歩くことが少なくなり、温泉街の賑わいが急速に失われてしまったことは事実である。また、こうした事実を背景に温泉街が衰退していく中で、かつてあった飲食店や土産屋、駄菓子屋等の地元の商店の多くも廃業に迫りやられ、温泉街全体の魅力や地元住民の愛着が欠落してしまったと言える。

さらに、温泉街以外の住民（60歳代～70歳代）に現在のあわら温泉とどのように関わっているのか聞き取りした。その結果、「法要や地区の親睦会等で年に2～3回あわら温泉に行っている」、「芦湯ができたので行って見たが、大型の足湯施設が近くにないため斬新で良かった」などの話を聞くことができた。その一方で、「あわら温泉に行くこともあるが、近隣の銭湯の方によく行く」や、過去同様に「温泉街に足を運ぶことはほとんどない」という話もあった。温泉街以外の近隣にも温泉施設ができ、また車社会の到来とともに近隣の娯楽施設に出向くことが容易となり、その結果あわら温泉に対する魅力が薄れてしまったのである。

（3）過去と現在の市民とあわら（芦原）温泉の関わりについて

前段の聞き取りにより明らかになったことは、温泉街と温泉街以外の市民に共通して、温泉街の賑わいや魅力がなくなったことで温泉街に足を運ぶことが少なくなったということである。過去には、ダンスホール等の娯楽施設や旅館から聞こえる三味線などの温泉情緒など、芦原温泉でしか味わえない魅力があったから、人が集い賑わいが創出されていたのである。しかしながら、現状は今の温泉街に魅力を感じられないと市民が思っているということであり、このことは観光客に伝える魅力がないとも言える。観光客が観光地において地元住民と交流する機会は必ずあり、その際の接し方によって観光客の満足度を向上させることもある。また、地元住民のロコミによる観光誘客効果も生まれなため、目に見えないマイナスの影響も少なからずあると言えよう。以上のことから、温泉街に市民が足を運びたくなる魅力を創出し、市民から愛される温泉街がもたらす効果を発揮しながら温泉街活性化を図ることが必要であると考えられる。

5 市民に開かれた温泉街の可能性について

それでは、市民が魅力を感じる温泉街とはどのようなものか。「3 あわら温泉の現状と課題」において、市民の憩いの場及び市民と観光客の交流の場として整備した足湯施設「芦湯」が4月のオープン以来順調に稼働していることを記述した。この芦湯は、温泉街の中

心地である湯のまち広場に立地しており、まさに観光拠点施設として位置付けられている。

ここでは、市民の憩いの場としての芦湯が市民の目にどう映っているのかを把握するため聞き取り調査を実施し、そこから見える市民に開かれた温泉街の可能性を考察する。聞き取りは平成 26 年 12 月に市内全域の各地区においてお宅への訪問により実施し、聞き取り対象者は合計 156 人で、年齢層と居住地は右図 7、8 のとおりである。また、聞き取り内容とその結果を次の (1) から (4) で後述する。

(1) 芦湯に行ったことがありますか？

調査の結果は、「行ったことがある」が 108 人で、69.2% の市民が芦湯の利用者であった。オープンして間もないため話題性による効果もあると思われるが、温泉街（温泉地区）以外の住民を含む実に 2 人に 1 人以上がすでに芦湯を訪れている結果は意外であった。

なお、行ったことがあると答えた市民に対し、続けて (2) から (4) の質問を行った。

(2) どのくらいの頻度で芦湯に行きますか？

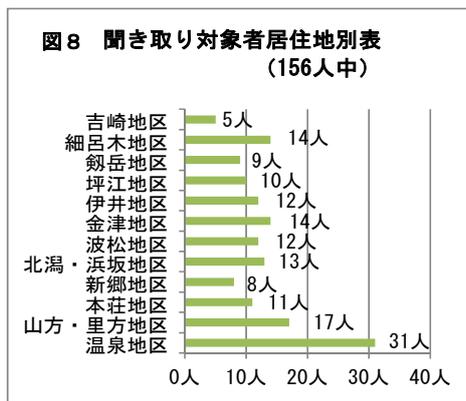
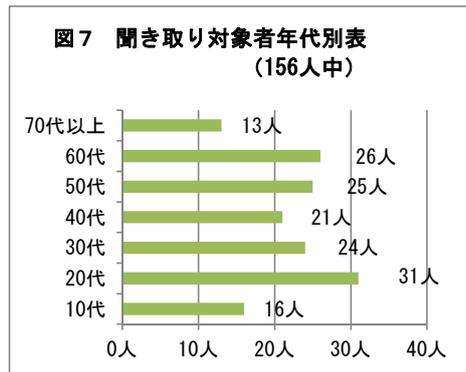
結果は、表 1 のとおりである。習慣的に芦湯を利用する市民は少数であり、そのほとんどが温泉街の住民であった。しかしながら、1 度きりの利用者は思いのほか少なく、リピート率が高いことから芦湯の利用満足度も高いことがうかがえる。

(3) 誰と芦湯に行かれましたか？（複数回答可）

結果は表 2 のとおりで、「その他」と答えた方に問うと、「職場の人と仕事帰りに立ち寄った」という結果が主であった。また、「自分 1 人」と答えた方の中には、「日課の散歩の途中に立ち寄っている」のほか、「知り合いがいれば話をしようと思って」という利用者も数名おり、一部の人からは芦湯が気軽に立ち寄れる場、また地元の人との交流の場として捉えられていることがわかった。

(4) 芦湯以外にどこに行かれましたか？（複数回答可）

芦湯に行った日に他にどこに行かれたかについて質問したところ、表 3 のとおりの結果であった。最も回答の多かったのは、「飲食」で、芦湯に隣接する湯けむり横丁の利用であった。湯けむり横丁は、10 軒の小さな屋台が軒を連ねる屋台村で、るるぶ.com の福井県の観光スポット人気ランキングで昨年から 2 年連続 1 位に選ばれるなど



1 週間に 1 回以上行く	3 人
1 ヶ月に 2～3 回程度行く	9 人
これまでに数回行ったことがある	75 人
1 度だけ行ったことがある	21 人
合計	108 人

表 1 「芦湯の利用頻度」

家族	39 人
友人	63 人
自分 1 人	12 人
その他	33 人
合計	147 人

表 2 「芦湯利用時の同行者」

温泉（旅館、セントピアあわら等）	39 人
宿泊（旅館、民宿等）	27 人
飲食（湯けむり横丁、居酒屋等）	90 人
まち歩き（買い物等）	15 人
イベント・催し	36 人
芦湯のみ利用	11 人
合計	218 人

表 3 「芦湯利用当日の他の利用状況」

観光客と地元住民に愛されたスポットであり、芦湯との相乗効果により今後の一層の繁盛に期待が持てる。一方で、「まち歩き」と答えた方が 15 人と少ないことから、現時点で市民がまち歩きしたくなるまでの温泉街とは言えないことも明らかとなった。

この聞き取りを通して、芦湯が現在の市民にとって好感度が高く利用頻度の高い施設となっていることがわかった。行ったことがあると答えた方に個別に質問すると、「近くに大きな足湯施設がないため行ってみたいと思った」、「無料で利用できる」、「夜 23 時まで営業している場所が他にない」などの答えが大多数であった。芦湯に対するこれらの評価から、芦湯が近隣では味わうことのできない魅力を市民に与えているということが言える。その魅力が市民を引き付けており、芦湯は気軽に足を運ぶことのできる市民に開かれた施設とも言えよう。かつて温泉街の住民にとって親しまれていた総湯は生活に欠かせない施設として市民が温泉街に足を運ぶきっかけとなっていたが、現在の市民にとっての芦湯は気軽に足を運ぶことができる魅力ある施設であり、総湯とは意味合いは違うが市民が温泉街に愛着を持つきっかけとなり得る。

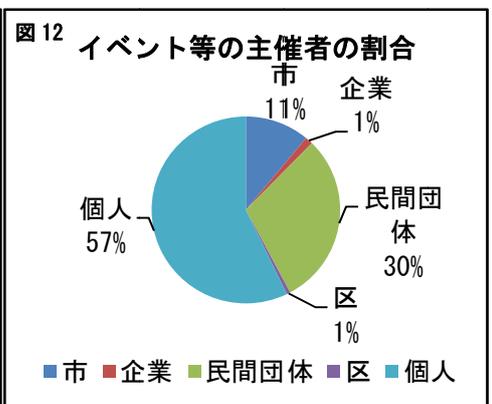
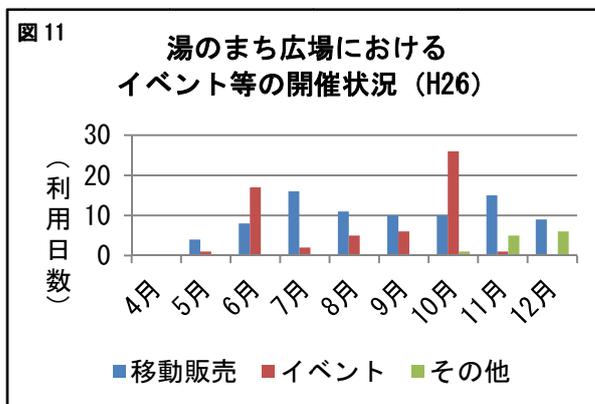
さらに、聞き取りの結果から芦湯や湯けむり横丁に足を運ぶ人が多いことがわかり、芦湯や湯けむり横丁が立地する湯のまち広場が温泉街の集客地帯であることが明らかとなった。そこで、湯のまち広場のイベントスペースで開催されているイベント等の取組について指定管理者のあわら市観光協会に聞き取りした。湯のまち広場のイベントスペースにおけるイベントの開催状況及び主催者の割合は以下の図 11、12 のとおりである。



図 9 「あわら温泉湯のまち広場（昼間）」



図 10 「あわら温泉湯のまち広場（夜間）」



あわら市観光協会からの情報提供に基づき筆者作成

イベント等の開催状況は、芦湯がオープンした4月から12月までで合計58日間で、そのうち10月のあわら・三国温泉泊覧会が26日間、6月の「ちはやふる week in あわら」が17日間と、行政や民間団体が主催するものがほとんどであった。湯のまち広場のイベントスペースについては、1日の利用料が千円と安価であるにもかかわらず、市民や地域(区)、地元の団体に利用されずにいる。なお、イベント開催に合わせて、広場の一角で個人が移動販売を行っているが、農家カフェとクレープ屋の2個人にしか活用されておらず900㎡の広いスペースの稼働率は低い状況であった。

このことは、現時点で芦湯とイベントスペースがうまく連携されていないことを意味する。芦湯に来た人にとってその利用時間が芦湯だけの楽しみに終わってしまっていて、今後のリピート率の低下に繋がりうるものが危惧される。

6 温泉街活性化の有効策の提言

前段で市が建設した芦湯が市民にとって温泉街を身近に感じられる存在になりつつある現状、また芦湯のある湯のまち広場のイベントスペースが有効活用されていない状況が明らかとなった。この2つの要素を結びつけることで、市民がもたらす温泉街活性化の有効策を提言したい。

なお、この提言を行う上で参考とした事例を紹介する。

(1) ファーマーズマーケット「きららの丘」

あわら温泉街から2kmほど離れたところに地元のJAが運営するファーマーズマーケット「きららの丘」がある。店内には、毎朝採れたての野菜や果物、市場に出荷されない数少ない特産物があり、市内外から多くのお客を集め販わっている。きららの丘のシステムは、年間2千円の会費で自由に店頭の商品を並べ、JAスタッフが販売し、売り上げに対し



図13「きららの丘」

15%のマージンをJAに支払うというものである。価格設定も生産者個人に委ねられているが、売れ残った品物はその日のうちに生産者が引き取る形である。安心のできるおいしい旬の食材を手に入れることができることで多くの顧客を獲得し成功を収めている。

(2) 提言①：朝市の開催

温泉街の周辺地区では、福井県発祥のコシヒカリをはじめ、スイカやメロン、サツマイモ、大根等の果物・野菜が豊富に生産されている。しかしながら、温泉街を歩いてもこれらの特産品を目にすることは少ない。一部旅館の館内で農産物が販売されていることはあるが、旅館の宿泊者にしか目につかない現状である。

ここで、あわら市における観光ともう一つの基幹産業である農業を活かした温泉街活性化の有効策として、温泉街における朝市の開催を提言する。地元の安心できるおいしい農産物を手にしたという市民のニーズと生産者としての市民を結びつけ、温泉街の賑わい創出を達成するメカニズムである。湯のまち広場のイベントスペースを利用して朝市を実施することで、芦湯を目的に温泉街に足を運んだ市民が地元の特産物に触れる機会が生まれ、一方で特産物を求めて温泉街に足を運ぶ市民も新たに出現するなど、市民自らが温泉

街を舞台に相乗効果を生み出し温泉街が活性化されることが大いに期待できる。

あるいは、観光客に対して市の特産物をPRできる幅も広がることや、市民と観光客の会話が弾むことで観光客にとっての満足度も向上するなどの効果も発揮できるだろう。

前述したきららの丘では、生産者の商品をJAスタッフが代わりに販売しているが、この朝市では朝市振興協議会（仮称）の公募により集った市民が販売する仕組みを確立したいと考える。生産者が直接販売することも考えられるが、特に夏場の繁忙期には負担が大きく、これを理由に長続きしないケースがあるためである。朝市振興協議会（仮称）については、朝市を運営する農家等の生産者や地元住民、JA等の関係者を中心に構成され、販売に携わる公募の市民は市内全域に幅広く声掛けを行い集うことを想定する。さらに、公募の人材が不足する場合にはシルバー人材センターの協力を得るなど、十分なバックアップ体制を構築することも検討している。なお、野菜等の商品に売れ残りが生じた場合の対策としては、きららの丘のように生産者が商品を引き取る方式をとるのではなく、生産者が湯けむり横丁をはじめとする飲食店に安価で提供し、料理に活用することを考えている。この他、芦湯の利用客に地元産のコンヒカリを使った朝がゆを販売するなどの仕組みを付加することで温泉街全体における経済循環をもたらすことも可能となる。

将来的には、現在一車線化の整備を進めている温泉街のメインストリートの歩道において、朝市や夕市が実施できるにまで発展させ、まち歩きの魅力付けを行いたいと考えている。今後、継続性のある事業の展開を前提にJA、地元生産者、旅館、商店街等との協議を進めていきたい。

（3）提言②：地域イベントの開催

前段で記述したとおり、湯のまち広場におけるイベントの開催状況が、6月と10月を除いて乏しい現状は、観光拠点として位置付けられる湯のまち広場の大きな課題と言える。芦湯や湯けむり横丁の利用が順調に伸びていることを考えれば、誠にもったいない状況である。これまで温泉街の一つの地区がこの湯のまち広場で自地区のイベントを開催したが、これを市内全域に拡大できないだろうか。

市民や地区が主催するイベントや催しがほとんど行われていない状況にあることから、湯のまち広場を地域コミュニティの拠点としても活用すべきと考える。芦湯の集客力を活かして芦湯を訪れる他地区の住民や観光客など、イベントを主催する地区住民以外も広く参加できるイベントを湯のまち広場で開催することで、イベント自体の盛り上がりはもちろん、地区を越えた市民や観光客との交流も図れ、主催者である地区住民と参加者相互の満足度が向上される効果が期待できる。仮に、市内にある135の地区が、自地区で開催されるそれぞれのイベントを年1回の頻度で湯のまち広場で開催すれば、年間を通して温泉街に賑わいが創出されるであろう。また、市内にある9つの公民館で民謡や和太鼓、健康体操、書道、パッチワークなど多種多様な定期教室や自主講座が開催されているが、日頃の活動の発表会や展示会を人が集まる温泉街を舞台に開催することで、クラブ活動そのものが活性化されることも大いに期待できると考える。

そして、湯のまち広場で開催されるこれらの地区のイベントや催しを観光情報として発信することで、市民が作り上げる観光イベントとして温泉街に新たな魅力が創出されると

考える。

今あわら温泉に必要なことは、かつて地元住民や観光客が温泉街に足を運んでいた頃の賑わいを取り戻すために、湯のまち広場を拠点とした温泉街において市民が自ら満足できる価値観を見つけ、市民自らが温泉街の魅力を創出することである。ここでの私の提言内容は、地区内の住民の同意やクラブ活動内容の見直し等が当然に必要なため、温泉街でイベントが常時開催されるという状況が定着するには一定の時間を要するかもしれないが、市民が地域や自らのために温泉街に足を運び、温泉街を舞台に活動を行うことで地域コミュニティが活性化される可能性を見い出すことができる。また、芦湯に来れば何かやっているという状況を市民自らが作り出すことで、観光客への温泉街の魅力向上、また市民と温泉街の観光客との交流を通じた温泉街全体の活性化にも繋がるものと考え。

7 おわりに

130年の歴史を誇るあわら温泉において、かつての総湯は住民が温泉を身近に感じられる憩いの場であり、当時先進的だった娯楽施設や観光客で賑わう温泉風情は、住民に温泉街の魅力を与え愛着をもたらしていた。今、時代の流れとともに薄れてしまった温泉街への市民の愛着を取り戻すことが、温泉街活性化の原点になると考える。

本レポートでは、新たに市民の憩いの場としてオープンした芦湯や市民、観光客双方に愛される湯けむり横丁がある湯のまち広場を拠点として、市民自らが温泉街で魅力を創出できる取組を提言してきた。この取組を実現するために私が行政の立場でしなければならないことは、広く市民に今ある温泉街の魅力を伝えること、そして市民が温泉街に足を運ぶためのきっかけづくりである。

これからも、市民に開かれたあわら温泉として、また一人でも多くの市民が自ら誇れる温泉街としてその名を全国に発信していけるように、市民と対話しながら取り組み続けたい。

(付記)

本レポートに記載する「芦原温泉」と「あわら温泉」については、次のとおり区別する。平成16年3月の市町村合併（芦原町と金津町の合併によりあわら市が発足）以前を「芦原温泉」、あわら市の発足以降を「あわら温泉」として表記する。

(参考文献)

- 芦原町『芦原町史』、1973年10月
- 芦原町『開湯芦原100年史』、1984年8月
- 読売新聞福井支局『芦原温泉物語—泣き笑い90年 湯の町繁盛記—』株式会社旅行読売出版社、1973年10月
- 財団法人中央温泉研究所『平成17年度芦原温泉泉源実態調査業務報告書』、2005年10月